

2019 年度私立大学図書館協会研究助成(機関研究)
研究報告

図書館学生協働活動の活性化と図書館利用の量的・質的影響
－広がり深める学習環境づくり－

広島都市学園大学
附属図書館

目次

I はじめに

II 研究の目的

1、研究の背景

- (1) 本学並びに大学附属図書館の状況
- (2) 課題と研究の方向性
- (3) 研究の目的

2、研究の方法

3、計画

III 活動の内容

1、宇品図書館での初めてのサークルづくり—図書館サークルメンバーの募集—

2、活動内容

- (1) ミーティング（木曜日、昼休憩）を中心としたサークルの発展
- (2) 第9回大学図書館学生協働交流シンポジウム
- (3) 交流会
- (4) 他大学からの学び—大学附属図書館訪問—
- (5) 広島都市学園大学らしい独自性のある活動

IV 研究の考察と今後の課題

1、研究の結果と考察

- (1) 学生が創る図書館へ
- (2) 学科を超えた学生のかかわり
- (3) 図書館にかかわる教職員の協働
- (4) 図書館利用の量的広がり—学生の貸し出し数—
- (5) 図書館利用で深める学び
- (6) 大学図書館訪問の意義

2、今後に向けて

- (1) サークルとしての活動の明確化
- (2) 理念づくり—継続をしていくために—
- (3) 「主体的・対話的で深い学び」
- (4) 学びの場としてのコミュニティづくり

V おわりに

引用

参考文献

I はじめに

大学生の本離れが叫ばれて久しい。全国大学生生活協同組合連合会による「第55回学生生活実態調査 概要報告」⁽¹⁾では、大学生1日の読書時間平均が30分であり、0時間は48.1%という結果である。因みに読書時間0時間は2012年まで30%台であったが、2013年に40.5%となり2017年の53.1%になるまで上昇を続け、2018年48.0%であった。120分以上読書をする学生は、2013年までは5%前後であるが2014年、2018年、2019年は7%台に増加している。2017年から2018年には、「30分以上60分未満」と「60分以上120分未満」が逆転し、17.0%から12.5%へ、13.0%から19.5%となっており、必ずしも全般的な読書離れが進んでいるというわけではない。0時間の読まない学生の割合は約半分を占め、120分以上のよく読む学生はわずかながら一定数おり、30分以上より60分以上が増加しているのが現状である。

前年の「第54回学生生活実態調査 概要報告」⁽²⁾には、興味深い調査がある。それは大学入学までの読書傾向を調査したものである。小学校入学前から高校にかけて「全く読まなかった」人は現在の読書時間も「0」が多いことが結果として示されている。また、大学生の現在「0」の人が、中学生時代には66.1%、高校時代には72.7%が「0」である。逆に長時間読書をしている学生は小学校入学前や高校から120分と長時間読書していることが示されている。このような調査から、読書習慣が形成できなかった大学生に、読書習慣を形成することは大きな困難であろうことがわかる。言い方を変えれば、読書習慣が身につけていない者が、大学生になっているのが現状である。

大学生のみの問題ではない。文化庁による「国語に関する世論調査」⁽³⁾の読書の項目「1か月に大体何冊くらい本を読むか」に対して、47.3%が1か月に1冊も本を読まないと回答しているという。1・2冊が37.6%、3・4冊が8.6%、7冊以上が3.2%となっている。1か月に全く本を読まない者は、平成25(2013)年度47.5%、平成20(2008)年度46.1%であり、ほぼ同様の割合を占める。「人が最も読書すべき時期はいつ頃だと考えるか」の問いには、10歳代が最も多く40.7%、9歳以下18.8%、年齢に関係なくいつでも18.8%である。

本学では同様のアンケートはとってはいないが、授業の中で学生に訊いたところ、普段全く本を読まない、漫画なら読む、ライトノベルはよく読むという趣味派もいれば、レポートが出たときのみ専門書を読まざるを得ない、実習のための本は読むし採用試験のため参考書・問題集はよく読むという実用中心の学生も存在する。本を読めば「楽しい・面白い時を持てる」「夢を持てる」「他者理解や自己理解に役立つ」「自分や生き方が変わる」などと例を挙げてくどくどと話しても逆効果になるであろう。現在の社会に生きる彼らにとっては別のツールが存在すると答えるであろう。また、読書は個人のプライバシーの問題でもある。

とはいえ、大学図書館にいと、せめて大学時代に本のよさを知り、読書習慣を持てれば、その後の個々の人生にも大きな影響があると思われる。最後の教育の場所として、何とか対応をしたい。

II 研究の目的

1、研究の背景

(1) 本学並びに大学附属図書館の状況

広島都市学園大学は、平成 21 (2009) 年広島県広島市南区宇品地区に、広島市内の私立大学では当時唯一の看護師養成課程をもつ 4 年制大学として、健康科学部看護学科の誕生とともに創立した。平成 25 (2013) 年には、広島県広島市安佐南区に健康科学部リハビリテーション学科、平成 26 年 (2014) 年には子ども教育学部子ども教育学科が健康科学部看護学科と同キャンパスに新設され、2 学部 3 学科を持つ大学となった。その後、言語聴覚専攻科と大学院保健学研究科が安佐南区に設置され、大学キャンパスは、広島市南部の宇品キャンパス(看護学科、子ども教育学科)、広島市北部の西風新都キャンパス(リハビリテーション学科、言語聴覚専攻科、大学院保健学研究科)に分かれている。本学のどの学科もその教育の特徴として、多様な他者とのかかわりを重視しているが、学修の過程で広くかかわり合う機会が少ない状況である。

各キャンパスにおける附属図書館を本稿では、宇品キャンパスの附属図書館を宇品図書館、西風新都キャンパスの附属図書館を西風図書館と表す。

上記の各館は、設立場所、設立時期が異なり、専門性に関しても異なる側面や多様性を抱えている現状である。例えば、西風図書館は健康科学部リハビリテーション学科、言語聴覚専攻科、大学院保健学研究科、さらに広島医療保健専門学校理学療法学科が対象学生であり、宇品図書館は健康科学部看護学科と子ども教育学部子ども教育学科が対象学生である。

(2) 課題と研究の方向性

① 大学生の図書館利用者の限定性

2018 年度学生総数約 1,000 名のうち 4~3 月までの図書館利用者数は延べ 5,678 人、貸出 12,575 冊という状況である。単純計算では、学生一人当たり年間約 12.6 冊、月に約 1.0 冊を借りているという現状である。しかし、日々学生の利用に直接関わる図書館職員によると、学生数が少なく利用者がさらに少ない分、図書館職員は利用者の顔を覚え易く、貸出対象者をほぼ特定できるようである。まったく図書館を利用しない学生の占める割合が大きいことがわかる。また、日常的に小説等を読む姿を学内で見かけることは少なく、貸出も少ない。

このように、本学図書館の課題は、学生の図書館利用が少ないという課題、利用者が限られており利用に関して二極化状態であること、各学科の特徴や学年の特徴がみられるということである。授業で図書館を利用しない限り、図書館には来ない学生も存在する。そのため、図書館利用の授業機会を増やすように、教員に呼びかけたりもしている。学生の要望をもとに選書をする機会もあるが、利用する学生も限られている。その一つであるブックハンティングは、2018 年度は、第 1 回：学生中心(広がる選書)、第 2 回：学生とゼミなどの教員(深める選書)とし、学生が自由に選書出来る機会と、専門教科担当教員とともに学びを深める選書を行う機会を設けたが自主的な参加者は少ない。行事であるビブリオバトルも、学生からの積極的な参加者は少なく開催が

危ぶまれるほどである。

② 学生の協働体験と図書館への興味

健康科学部の2つの学科はキャンパスが分かれており、公共交通機関を用いると1時間程度の時間がかかる。学生のみならず教員、図書館職員等も頻繁には交流できない。図書館運営に関する課題解決の方向性模索中に、2018年9月6～7日第8回大学図書館学生協働交流シンポジウム「学生と共に成長する図書館・協働が生み出す新しい魅力」に図書館長と西風図書館職員の2名で参加し、各大学の様々な取り組みや学生の活発な活動を目の当たりにした。本学の学生は学科を超えての関わりが少ないこともあり、多様な他者との協働体験が少ないという課題もある。こうした学科・学部や大学を超えた協働体験の機会を本を中心に行い、図書館の課題にも対応できないのかを考え、サークル結成の可能性について参加した図書館職員と話したところ、西風図書館では放課後には学生アルバイトがおり、こうした学生を中心にサークル的な活動していることを聞いた。学部を超えた2つの学科がある宇品図書館にも学生サークルをつくり、西風図書館との協働を行うことの可能性をみた。

(3) 研究の目的

大学図書館は、「大学における学生の学習や大学が行う高等教育及び学術研究活動全般を支える重要な学術情報基盤の役割を有しており、大学の教育研究にとって不可欠な中核を成し、総合的な機能を担う機関の一つ」である。大学を巡る環境の変化の中で、学生は授業を受けるのみではなく主体的・実践的な学びが重視され、大学図書館にもその「支援の場の提供や図書館職員等による学習支援」が求められている。(文部科学省「大学図書館の機能・役割及び戦略的な位置づけ」)

本学においてもこれまで、図書館職員により大学図書館の機能をより発揮させる努力は行われてきたが、学生の主体的な図書館利用は十分とはいえない。「学生を待つ」図書館から、「学生と共に学び活動する」図書館へと変わっていくことで、学生の主体性が育つことが予測できる。本研究では、本学図書館が、学生の主体的な学びや人格形成の支援をすることを目的として、利用の量的・質的增加を図り、学生参加型図書館の運営の在り方を目標とし、その方法について考察し研究するものである。言い換えれば、「図書館における主体的・対話的で深い学び」を目指すものである。

本学大学図書館の現在の課題は、人間性の涵養を図るための教養図書や専門性を深めるための専門書の利用をさらに図ることであり、そのために次の1)～3)の学びを行う機会をつくる。

1) 学科を超えて互いに関わり成長し合うとともに、教養的なことを広く学び合い、学生としてより深く広い学びを保障する機会を持つ。2) 学生が図書館に、より興味・関心を持ち、より利用していくために、学生が図書館に来館する機会を多くしたり、気軽に足を運ぶ機会を設けたり、行事に参加したりし、日常的・積極的に図書館に関わるようにする。また、学生の視点で、選書した図書を増やし、館内環境を馴染みやすくし、機能的・心理的にも学生寄りにする。3) 「学生のため」の図書館行事をこれまでの「図書館職員による」から「学生を中心にした学生・図書館職員・教員による」協働の運営にしていく。

2、研究の方法

実践的研究による課題解決をめざす。「学生と創る図書館—学生と図書館職員・教員との協働が生み出す図書館づくり—」を目指し、2019年度はその基礎作りを行う。そのための有効な方法を探究する研究である。図書館学生サークルを立ち上げ、学生目線の図書館運営の在り方を探る。そのため他大学の実践や研究より学び、本学に適切な方法を選択し、サークルの立ち上げ、学生により活動目的、活動内容、活動計画を作成し活動していく基盤を初年度はつくる。学生サークルを軸にして、学生全員が図書館に意識と足が向き、より広くより深い図書館の利用を目指す。

3、計画

図書館長・各図書館職員で計画を立て、図書館運営委員会で教員の協力を求めた。構想した具体的な活動は、2つの図書館の協働と学生の交流・学び合い、他大学訪問と学生交流、図書館を場とする主体的居場所づくり（学生展示コーナー等）、学生視点での選書の機会、学生主体の図書館行事（ビブリオバトルなど）、学生による学習支援の機会（学習支援カルタづくりなど）、「第9回大学図書館学生協働交流シンポジウム」に参加・発表し他大学学生と交流する等である。⁽⁴⁾

予定時期	学生サークルの活動	図書館職員等、教員の活動	図書館行事
2019年 1～3月	図書館学生サークルの成立に向けて大枠の準備 ・組織 ・活動内容 ・規約の作成 サークル構成員の募集 学生によるグループ活動 ・組織づくり、活動内容、活動計画の決定 ・役割分担の決定 ・活動報告・広報	図書館職員打ち合わせ（1月） 図書館運営委員会（2月） 図書館職員打ち合わせ（3月） ・図書館職員等、教員の意識調査 ・2018年度学生アンケート実施・まとめ ・2018年度図書館利用状況まとめ ・2019年度活動計画の共有	
2019年 4～5月	新入生サークル紹介（入学式） サークル会議 学生サークル選書 大学図書館サークルコーナー 他大学図書館訪問研修 （記録、意見のまとめ） 活動の報告・広報	図書館運営委員会（4月） 図書館職員打ち合わせ（5月） 他大学図書館訪問研修引率 （記録、意見のまとめ）	新入生ガイダンス 学習支援カルタづくり
2019年 6～7月	学生サークル選書 大学図書館サークルコーナー 他大学図書館訪問研修 活動の報告・広報	図書館運営委員会（6月） 図書館職員打ち合わせ（7月）	第1回ブックハンティング（ひろげる選書）
2019年 8～9月	学生サークル選書 大学図書館サークルコーナー 夏読キャンペーン・イチオシPOP大賞・読書感想文コンテスト準備 活動の報告・広報 「第9回学生協働交流シンポジウム」への参加	図書館運営委員会（8月） 図書館職員打ち合わせ（9月） 他大学図書館訪問研修引率 （記録、意見のまとめ）	夏読キャンペーン イチオシPOP大賞 読書感想文コンテスト
2019年	学生サークル選書	図書館運営委員会（10月）	学習支援カ

10～12月	大学図書館サークルコーナー 大学祭準備 (ビブリオバトル等) 活動の報告・広報	図書館職員打ち合わせ (11月) 図書館運営委員会 (12月)	ルタ大会・ ビブリオバ トル (大学 祭) 第2回ブッ クハンティ ング (深め る選書)
2020年 1～3月	学生サークル選書 大学図書館サークルコーナー 学生によるグループ活動のまとめ ・組織、活動内容、活動計画の 改善と次期サークル活動計画 活動の報告・広報	図書館職員打ち合わせ (1月) 図書館運営委員会 (2月) 図書館職員打ち合わせ (3月) ・図書館職員等、教員の意識調査 ・2019年度学生アンケート実施・ まとめ ・2019年度利用状況まとめ ・前年度との比較・分析	
	2019年度学生活動総括 ⇄	研究結果報告書の作成	⇄図書館行 事総括

Ⅲ 活動の内容

1、宇品図書館での初めてのサークルづくり—図書館サークルメンバーの募集—

活動の実際の様子については、図書館に関わる学生を初めて募集することになる宇品図書館を中心に述べていく。果たして学生が集まるのかが図書館職員の大きな不安であった。3月の段階で、館長の所属する子ども教育学科の学生3名の協力を得ることとなる。うち1名は4月より4年であるためサークル長を依頼し、4月の新入生サークル紹介での勧誘を頼む。この学生は小学校教員を目指しており、3月末の採用試験模擬試験で「学校図書館の3つの機能」が出題されたこともあり本・読書・図書館にあまり関わってこなかったことも反省し、サークル長を引き受ける。新入生サークル紹介での言葉は以下の通りである。「この4月から活動を始める新しいサークルです。そのため、大まかな活動の計画は図書館で練ってありますが、これから何をするかを一緒に決めていくことができます。図書館には3つの役割があります。読書・学習・情報収集です。これらを私たち学生で推進していきたいと思います。例えば、図書館内にサークルのコーナーが用意してあるのでそこを自由に企画することができます。また、他大学を訪問し、図書館を見学し、学生さんと交流します。ブックカフェも計画しています。これ以外にももっと図書館を楽しめることをしていきましょう。本が好きな人も、そうでない人も、自分たちの特技や興味を活かした活動ができます。大学に入って新しいことを始めてみたいと思っている方、新しいサークルで学科を超えて仲間と楽しい大学生活をおくりましょう。」サークル紹介後、すぐに2名の看護学科学生が図書館に訪れ、その後、数日の間にまた申し込みがあった。また、宇品図書館職員が、図書館を利用している在学生に声を掛け、看護学科2年2名が参加する。西風図書館はアルバイト学生が図書館職員の働きかけでサークルメンバーになり、図書館運営委員の教員の声掛けもあり、新たに1年が参加することとなる。

4月末にサークルの届け出を行ったが、その際のメンバーは以下の所属と学年である。サークル

長子ども教育学科4年1名、看護学科2年2名、1年5名、子ども教育学科3年2名、2年1名。西風図書館では以前からアルバイトをしていたリハビリテーション学科3年1名に副サークル長を依頼し、2年3名に加えて、サークル紹介や教職員の働きかけで1年5名が加わる。

宇品図書館での最初のミーティングでは、届け出た計画に基づいて、学生に活動内容を示す。そこには、両館のサークルメンバーの交流会、他大学図書館サークルの活動状況把握と交流、学習支援カルタづくり等が記載されている。

宇品図書館、西風図書館の交流を図るために、学生の学業や生活を妨げない条件をつくり、活動できる時間を模索した。まずは各館での活動時間を設定しようとした。学生の時間割に基づきサークル活動時間を週に1コマ程度設定しようとしたが、学科によりカリキュラム改革による授業数増加・時間割の変更もあり、共通の空コマを見つけることができず、各自が空コマに活動し、週に一度のミーティングにて報告することになった。5コマまでの授業、放課後はアルバイトがあるなどで設定できない等の理由もあり、両館ともミーティングは木曜日昼の休憩時間になった。宇品図書館では、昼食後に行くこと、図書館と棟が異なる学科があるため行き来の時間に余裕をもつこと、学生によっては昼食後の授業で着替えが必要なことなどの条件の中で、実質15分から20分しかとれない状況であった。そうした中で、両館の学生の交流会は、イベントや夏休みなどを用いることとなった。

2、活動内容

(1) ミーティング（木曜日、昼休憩）を中心としたサークルの発展

宇品図書館のミーティング記録をもとに、その発展段階を記載する。なお、本稿では出席者に記載されていた個人名を所属と学年と人数で示す。

① 模索期（集まる時間をどうするか？ 何をするか？等）

4月・5月のミーティングは、4月は18日・25日、5月は9日・16日・23日に行われた。看護学科は1年が多いため、大学に慣れるとともに、サークルにも慣れていった。皆、比較的大人しく、なかなか自分の意見を言わないため、事前に学生に活動したい内容についてアンケートを行った。「図書館新聞をつくりたい」、「サークル・コーナーの飾りつけをしたい」等の意見も取り入れようとした。「サークルに来なくなるのではないか」、「サークルで気まずくなると図書館に来なくなるのではないか」等の心配があったことと、教員のように簡単に指示しにくい立場にあることで、図書館職員は学生に大変気遣っていたようである。この時期は空コマを使った自主的参加を促しており、参加の多い学生と、参加が少ない学生とが分かれていった。学生が活動したい内容の役割分担をするがなかなか進まない。図書館職員にとっても、サークルの学生たちにとっても、模索期であったといえよう。例として、3回目までの記録を挙げる。

日付	4月18日	木曜日	時間	12:30 ~ 12:50
出席者	子ども教育4年1名・3年2名・看護2年2名・1年2名			
内容	初ミーティング。司会進行を館長が行う。サークルメンバーの顔合わせとし、自己紹介、活動内容の			

	説明を行う。それぞれの活動内容についてリーダーを決める（指名）。 見学として声をかけていた子ども教育2年〇くんがミーティングに参加。→入部
--	--

日付	4 月 25 日 木曜日	時間	12:30 ~ 12:50
出席者	子ども教育4年1名・3年2名・2年1名・看護2年2名・1年4名		
内容	司会進行を館長が行う。前回欠席の〇さん、新入部員の〇くん、〇さんを含め、再度自己紹介を行う。展示コーナーと、図書館便り（新聞）の進行具合の報告。展示コーナーの飾りつけ案を紹介し、飾り付けをする人を募集する。（複数人挙手があり）メンバーの空き時間を聞いたところ、全員と一緒に集まって活動することが難しいことがわかったため、普段の活動はそれぞれが空いた時間に来て行うことを願う。		

日付	5 月 9 日 木曜日	時間	12:30 ~ 12:50
出席者	子ども教育4年1名・3年2名・2年1名・看護2年1名・1年4名		
内容	司会進行を館長が行う。新入部員の〇さんの紹介。1週間の個々の活動報告。 ブックハンティングについて案内する。カルタについて説明し、担当を決める。		

② 期待期

6月は、6日・13日・20日・27日にミーティングを行った。ミーティングですべきことが徐々にわかってきたため、6月よりサークル長に司会を頼む。徐々に学生のみで話し合いが出来るようになる。話し合いの内容は事前にサークル長と共有する。サークル員は、集まることに慣れ、始まる前におしゃべりもするようになる。図書館新聞を作成するにあたり、宇品キャンパス所属学科の学科長に図書に関するインタビューを行い記事にすることになる。

日付	6 月 6 日 木曜日	時間	12:30 ~ 12:50
出席者	子ども教育4年1名・3年2名・看護2年1名・1年4名		
内容	司会進行をサークル長が行う。（前回の伝言を受けて） 2週間の活動報告を1人ずつ発表してもらう。（足りない部分は職員が補った） →サークル長「カルタ・インタビューについて看護学科の方が進んでいるようなので、子ども教育学科も順次進めていくように」と指示。展示コーナーのPOP作成を何人かに行って欲しいと伝える。 例として、昨年の「イチオシ本POP大賞」の作品コピーを回覧する。また、イベントの紹介も行う。 →サークル長「POP大賞の作品は投票期間だけでなく、長い期間館内に掲示してはどうか。また作ったPOPを西風図書館でも展示してもらうことで交流につながるのではないか」との意見が出る。		

6月15日にブックハンティングがあり、一般学生の募集後に、補充する形でサークル員が参加する。学外の書店でブックハンティングをした後、宇品図書館と西風図書館のサークル員が初めて交流会を持つ。自己紹介や今行っていることの紹介等をしあい、楽しそうな会話が弾む。

日付	6 月 20 日 木曜日	時間	12:30 ~ 12:50
出席者	子ども教育4年1名・3年1名、看護2年1名、1年4名		
内容	<p>司会：サークル長</p> <p>15日のブックハンティングとサークル交流会について、感想を発表する。</p> <p>(・学科に必要な本は何か考えながら選ぶことが出来た・選んだ本が図書館にあるか調べることが図書館にある本を知ることにつながった・最近本を読む時間がなかったので、久しぶりにゆっくり本を選ぶことが出来た・西風メンバーと話す機会になってよかった…など)</p> <p>1週間の活動報告。POP作成1名、完成品の報告。</p> <p>大学図書館学生協働交流シンポジウムの日時、開催場所、内容と日程について案内を行う。</p>		

日付	6 月 27 日 木曜日	時間	12:30 ~ 12:50
出席者	子ども教育4年1名・3年2名・2年1名、看護2年1名・1年2名		
内容	<p>司会：サークル長</p> <p>大学図書館学生協働交流シンポジウムの参加の案内を行い、開催要項を配布した。</p> <p>(メンバーのLINEで開催要項を貼り付け、欠席者への周知を学生が行う)</p> <p>夏休みの活動について、活動できる日を確認しておいてもらうようお願いする。</p> <p>後日、看護2年〇さんより大学祭の実行委員をすることになったため、大学祭でのサークル活動は難しいとの連絡を受ける。</p>		

③ 大学図書館学生協働交流シンポジウム参加に向けた意欲期

7月・8月は、7月4日・11日・18日・25日、8月8日にミーティングを行った。7月はシンポジウム参加に向けて、参加の確定を図り、活動の内容を深めようとする図書館職員等の働きかけもあり、シンポジウム発表に向けてサークル長を信頼する姿がサークル員から見受けられはじめた時期である。前期定期試験を経て夏休みに入り安定してきたサークルの活動が壊されるのではないかと不安にもなる。

日付	7 月 4 日 木曜日	時間	12:30 ~ 12:50
出席者	子ども教育4年1名・3年2名・2年1名、看護1年4名		
内容	<p>司会：サークル長</p> <p>大学図書館学生協働交流シンポジウムについて、再度案内を行う。次回ミーティング(7/11)までに必ず参加が可能かどうか返事をお願いする。</p> <p>また、事前アンケートを提出する必要があるため、活動のやりがいなど学生が回答をする必要がある部分について、それぞれに少しずつ書いてきてもらうようお願いする。集まったものを元に、職員でまとめる。</p> <p>4限目の時間帯に看護2年〇さんが来て、ミーティングの内容を確認。シンポジウムの事前アンケートについて提出。</p>		

日付	7 月 11 日 木曜日	時間	12:30 ~ 12:50
出席者	子ども教育3年2名、看護2年1名・1年2名		
内容	<p>サークル長欠席（採用試験を控えているため）</p> <p>大学図書館学生協働交流シンポジウムについて参加の確認を行う。参加希望者は看護1年〇さん、〇さん（前日に確認済）、〇さん、子ども3年〇くん（前日に館長より確認済）、1年生からの希望もありサークル長〇くんが出席となった。先週記入をお願いしていた事前アンケートについて提出があった。</p> <p>夏休みの活動スケジュールを決めるために、活動できる日を書いてもらう用紙を配布した。また、以前行ったインタビューについて記事を書くことを確認、時期は定期試験が終わってからとなった。</p> <p>（大学図書館学生協働交流シンポジウムに西風から1年生〇くんが参加予定。）</p>		

日付	7 月 18 日 木曜日	時間	12:30 ~ 12:50
出席者	子ども教育4年1名・3年2名、看護2年1名・1年3名		
内容	<p>大学図書館学生協働交流シンポジウムについて、申し込みを行ったが、募集人数を超えて応募があったため、参加できなくなったことを伝えた。シンポジウムの予定日はサークルの活動を行う予定であることを伝えた。</p> <p>また、福山大学への訪問予定があり、スケジュールを調整していること、日程は9月の中旬（17日か18日）を考えている事を伝える。夏休みのスケジュールを提出してもらうよう依頼した。シンポジウムのアンケートで皆に書いてもらった今後やってみたいことなどを紹介し、夏休み中に現在製作中の物に優先順位をつけて完成させていくという流れで活動をしていくことを確認した。</p> <p>8/1（木）は試験期間中のためミーティングは休みとする。</p>		

このように毎回ミーティングの記録をとっていった。すべてのミーティング記録を掲載するわけにはいかないため、前半部分のみを掲載した。学生の記録を期待していたが、残念ながら図書館職員が記録することとなり、学生が主となりサークルを運営する難しさを痛感した。

夏休みには、絵本の読み合いや学習支援クイズづくり、飾りつけの準備（ハロウィン、クリスマスまで）、図書館新聞づくり（教員へのインタビューと編集）をした。また、大学図書館訪問を行った。こうした活動を通して、サークル員たちが互いに安心してかかわり、意見を言い、目標を持って活動をするようになっていった。（サークル活動の安定期）後期の授業が始まり、コーナー飾りつけ、POPづくりに加えて、第2号図書館新聞づくり、カルタづくり、そして、ビブリオバトル準備などを、ミーティング、個々の活動、協働活動を交互に繰り返しながら行うようになる。（定着・発展期）その後、各サークル員の特性を活かした活動や本学図書館サークルの独自性となる「認知症ブックカフェ」に自己の役割を見出す学生も出てきた。（個性・自己発展期）

宇品図書館 学生サークルの活動の様子



↑ ミーティングの様子



↑ 飾りつけは個々が空コマを利用して作成



↑ 図書館新聞の原稿を作成中



↑ 図書館新聞第1号



↑ ミーティング時に全員で作業



↑ 展示コーナー

西風図書館 学生サークルの様子



↑ 西風のサークルメンバー



↑ 展示コーナー



↑ 慣れた手順で作成中



↑ POPづくり



↑ 広島市立中央図書館で認知症についての展示



↑ 展示の準備の様子

④ 両館共通の計画

- ・ POPづくりや飾りつけなどサークルコーナーの作成
- ・ 図書館行事への参加（ブックハンティング、「イチオシ本 POP 大賞」、ビブリオバトルなど）
- ・ 第9回大学図書館学生協働交流シンポジウム（島根）参加・発表
- ・ 他大学訪問（図書館協議会等で訪問を打診するが、夏休みなどになった）

⑤ 各館独自の計画（各図書館対象学科の学びを深める活動）

宇品図書館は「学習支援カルタ」を作成し、西風図書館は「認知症ブックカフェ」に参加する。

（2）第9回大学図書館学生協働交流シンポジウム

昨年の参加者募集時期を確認し、申し込みを待ち構えていた。学生の参加募集は90人、各団体7名以下だったので学生と教職員の参加を両館で調整した。募集が始まってもすぐに連絡をしない学生がおり困ったが、参加学生は看護学科1年3名、リハビリテーション学科1年1名、子ども教育学科4年1名、3年1名で決まる。締め切りの前日に本部に連絡し参加応募状況を確認し余裕があることがわかり、学生の確実な参加者を確認した後、当日にメールにて応募したが、定員に達していたため参加ができなかった。

（3）交流会

互いに図書館に行きあうことを考えていたが、どの学科も授業が合わず、ブックハンティング

やビブリオバトルなどの図書館行事、他大学訪問などで協働活動をした後に、交流会を持つことにした。

・6月15日ブックハンティング後交流会（於：某コーヒーチェーン店）

看護学科2年2名、1年2名、子ども教育学科4年1名、3年1名、2年1名

リハビリテーション学科3年1名、1年1名



・9月5日（木）（於：西風図書館）

夏休みを利用して、宇品のメンバーで西風キャンパスを訪問し、交流した。

看護学科1年3名、子ども教育学科4年1名、リハビリテーション学科3年1名



・11月17日認知症ブックカフェ後の交流会

（於：広島市立中央図書館）

リハビリテーション学科3年1名、2年3名、
1年3名 看護学科1年1名

子ども教育学科3年1名、2年1名



・11月24日大学祭・ビブリオバトル後の交流会（於：宇品図書館）

看護学科1年3名、子ども教育学科4年1名、3年1名、リハビリテーション学科1年1名

初めての学生がつくるビブリオバトル（事前準備から、当日の運営・司会など）



↑ 飾りつけ



↑ 飾りつけや設備の準備



↑ 直前の打ち合わせ



↑ 司会はサークル学生



↑ バトルの様子①



↑ バトルの様子②

ビブリオバトル終了後、交流会をした。共同作業の後であったため、交流が盛り上がった。

- ・1月19日認知症ブックカフェ後、交流会
リハビリテーション学科3年1名、2年2名、1年2名、看護学科1年2名、
子ども教育学科3年1名
- ・2月13日力田病院認知症カフェの打ち合わせ兼リハーサルと簡単な交流会
看護学科1年1名、子ども教育学科3年1名、リハビリテーション学科3年1名
- ・2月15日力田病院認知症カフェ前後、簡単な交流会
看護学科1年1名、子ども教育学科3年1名、リハビリテーション学科3年1名

(4) 他大学からの学び—大学附属図書館訪問—

学生がサークル活動などで大学図書館にかかわっている大学に、協議会などを通じて訪問のお願いをした。本学図書館サークルの学生の参加希望者が訪問した。訪問後、①学生と交流した感想 ②図書館の様子や学生の活動についての感想 ③今後の活動に役立てたいことについて、アンケートをとった。各大学での様子やアンケート結果は以下のとおりである。

① 広島市立大学 (9月5日 (木))

子ども教育学科4年1名、看護学科1年3名、リハビリテーション学科3年1名

西風キャンパスのそばにある広島市立大学附属図書館を訪問する。当日は夏休みのためアルバイト学生はいなかったが、図書館職員の方より全館内の案内と丁寧な説明を受ける。ブックハンティングのコーナーには学生の手作りパネルがあった。館全体に様々な工夫があり、大変参考になった。初めて他大学の図書館に行き、展示の工夫などを聞くことができたため、学生も多くの示唆を受け、何かを作りたいという意欲が湧いてきたようだ。

広島市立大学訪問時の写真



↑ 全館内を案内していただいた



↑ ブックハンティングコーナー

広島市立大学訪問後のアンケート

① 広島市立大学を訪問して、また図書館で活動している学生さんとの交流をしてみたの感想をお書きください。

- ・スーパーでよく見るアンケートのようなものがとても面白かったです。
- ・毛布があったり、しおりを集めていたり工夫がありよい図書館だと思いました。
- ・市立大学は芸術コースがあって、BOOKハンティングの文字がかっこよくてステキでした。インパクトがあって良いなと思いました。
- ・広島市立大学の図書館に初めて入らせてもらって、大きい大学とあって図書館も大きかった。
- ・本の置き方やPOPの書き方もオシャレで目を引く工夫が多かったよう思う。
- ・スケールが大きい
- ・細かな所まで掲示物を工夫して作っていた。
- ・様々な取り組みをしていた。

② 図書館の様子や、学生の活動の中で印象に残ったことなどをお書きください。

- ・柔らかな雰囲気だった
- ・しおり
- ・イスがオシャレで広くて、アルバイトができるのが良いと思いました。
- ・図書館の展示に図書館関係の人以外も参加していて、学部としての良いところを発揮できていてすごかった。
- ・本の感想などが他の人にも見られるのが、その本を読んだことのない人にも伝わりやすいように思った。
- ・3階建てになっていて、中が吹き抜けて広いなと感じた。
- ・図書館内にソファがあり、毛布があってとても快適そうで良いなと思いました。
- ・ご要望・相談の掲示板があって、見たことのない発想だなと思いました。
- ・悩み相談などをしていた。
- ・ビブリオバトルをしている。
- ・新入生の好きな本や作家のアンケートをとっている。

③ 今後の活動に取り入れたい、役立てたいことは何でしたか。

- ・しおりを集めたり、作ったりしてみたいです。
- ・しおり
- ・本の帯の活用
- ・私個人的には「好きな作家アンケートランキング」「貸出上位ランキング」が良かったです。読む本が自分の好きな作家に偏っていて何が面白いのかも分からなかったので…。東野圭吾が大学生に人気だと知って早速ネットで調べて人気のある本を図書館で借りました。
- ・本を読んだ人の感想が知りたい。そして、学生オススメの本や、作家さんなんか面白いです。図書館にあまり出入りしていない学生分も知れるので良いなと思いました。
- ・アンケートをとってみたい。

② 福山大学 (9月17日 (火))

福山大学：図書館倶楽部4名、キャンパスリポーター1名

本学学生：子ども教育学科4年1名、3年1名、看護学科2年1名、1年3名

昼食に福山大学食堂によって図書館に伺うことを伝えていたが、約束の時間の前に、図書館長、図書館職員、図書館倶楽部の学生が食堂に来られ、共に昼食をとりながら始まり、和やかな雰囲気の中で行われた。図書館倶楽部の学生と倶楽部担当の図書館職員の方に、大学図書館学生協働交流シンポジウムのことや、図書館倶楽部の活動について説明していただいた。その後、グループに分かれて、様々なことをお話した。

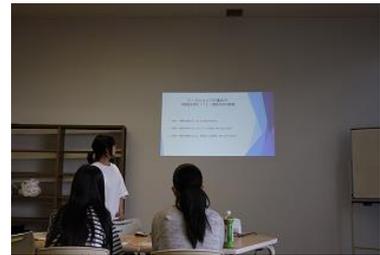
福山大学訪問時の写真



↑ 記念撮影



↑ 図書館倶楽部の活動やシンポジウムの様子を説明してもら



↑ 2つのグループに分かれて話し合い↑



↑ 学生作のPOP

学生同士で交流でき、大変刺激になったようで、読書会、裏ビブリオバトルなどの話を、本学の学生たちは目を輝かせて聞いていた。以下、参考になったことを記述する。

福山大学図書館倶楽部では、通常の活動は毎週のランチミーティングであり、やはり授業の空き時間の都合が合わず、お昼の時間に食事を兼ねて集合する方法をとっている。年間の活動としては、読書会、ブックハンティングの運営、ビブリオバトルの開催、カウンター業務、広報誌の作成や館内展示を行っているようだ。

広報誌の見本をいただいたが、新入生に向けて図書館倶楽部の活動や、メンバーからおすすめ本を紹介したものだった。メンバーが考えた公式キャラクターがおり、本学学生は広報誌やキャラクターの作成を頭に描いていた。

「第9回大学図書館学生協働交流シンポジウム」のポスター発表用の資料を用いて、福山大学の1年が発表してくれた。残念ながら本学は参加できなかったが、シンポジウムでの発表がどのようなものなのかについて、体験することができて大変よかった。新入生にすすめる50冊の本の冊子を見て、同様の冊子を作成し紹介をしてみたいという意見もあった。

また、今回の学生同士のグループ話し合いでは、「本を読んでもらうためにはどうすればいいか」の課題をもって参加した本学学生が、「裏ビブリオバトル」という企画があるということを知り、

強く惹きつけられていた。裏ビブリオバトルでは紹介する本を読みたくなくなるようなマイナスの紹介（話が長い、難しいなど）をしていく。その否定から疑問をもち、その本に興味をもってもらい、読んでもらう。その方法を聞き、多くの学生が興味をもった。

本学学生が図書館で活動している他大学の学生と実際に話をする機会は初めてのことであったため、活動的な様子や、人前でしっかり発表している様子など、良い刺激を受けているようだった。意見交換では、好きな本の話題になっていたり、本学サークルで作成した新聞を説明したり、大人しいと思っていた学生たちが活発に話をしている姿が印象的であった。キャンパスリポーターの学生も参加しており、図書館を中心に様々な企画や学生の活動があることを学べた。

本学図書館職員も、倶楽部担当の図書館職員から話を聞くことができ、学生サークルのつくり方や活動内容・活動の広げ方、図書館の工夫などを聞き大きな学びとなり、職員研修にもなった。図書館館長も館長同士での話などが出来、大変勉強になった。

福山大学訪問後のアンケート

- | |
|--|
| <p>① 福山大学を訪問して、また図書館で活動している学生さんとの交流をしてみたの感想をお書きください。</p> <ul style="list-style-type: none">・図書館内の活動や、シンポジウムの様子を聞くことができてよかった。・図書館がめっちゃくちゃ大きい・学生さんの活動がすごく積極的で色々な活動に参加されていた。・ブックハンティングが全然違うと思った。・新入生向けの50冊の本という冊子を自分たちも作ってみたい。・山の中にあって行きにくい分、スクールバスが走っているので便利でよいと思った。・昼食の時間にわざわざ来てくださって、実際に部屋で会うより早くコミュニケーションが取れたので、緊張しすぎず嬉しかった。・同じ1年生でもハキハキと人前で発表されている方がいて、元から持っているものと、踏んできた場数が違うんだろうなと思いました。・広報を出している・カウンター業務を学生がしているので、してみたいと思った。 |
| <p>② 図書館の様子や、学生の活動の中で印象に残ったことなどをお書きください。</p> <ul style="list-style-type: none">・ポスターやパンフレットがカラフル・ジャンルごとにしっかり分けられていて、所々のスペースに机とイスが置いてあったり、落ち着いて本を探したり読めるようになっていた。・明るくにぎやかな学生さんが多い・自習室が広がった。・書庫に入ってみたかった。・古い本や新聞がたくさんあった。・留学する学生さんも多いからEUと連携して活動していると聞いて、福山大学独自の企画だと思いました。・図書館倶楽部の方は兼部されている方が1年生でもいて、その中でも活動されているのが多忙だなと思いました。 |

した。

- 読書会は高校での国語の授業に似ているなど感じた。
- 読書会についてやってみたいと思った。
- 都市大とのブックハンティングとは違った。

③ 今後の活動に取り入れたい、役立てたいことは何でしたか。

- おすすめ本の紹介
- 新聞作り
- 活動歴などやはり相手の方が先輩なので、今までどんな活動をされたのかをまねをして、いずれは独自の活動に繋がれると良い。
- マスコットキャラクターの作成
- 新入生に向けたおすすめ本を集めたコーナーを作りたい。
- マスコットを作りたい。
- 公式キャラクターを作って全生徒にお披露目したら、図書館サークルの活動感が伝わると思った。
- 図書館サークルの活動内容を紙に印刷して、人目につく場所に置いておくのもよいと思った。
- 思いつきですが、宇品キャンパスは県立図書館と近いので県立図書館と連携して活動するのも良いと思います。
- 読書会をしてみたい。
- 公式のキャラクターを作ってみたい

③ 広島女学院大学 (9月19日(木))

子ども教育学科4年1名、看護学科2年1名、1年2名

図書館課長に館内を案内していただいた。展示コーナーを企画した職員の方に、展示をする時の工夫などを聞くことができた。また、館内にある色々な案内表示も印象に残ったようだった。

広島女学院大学訪問時の写真



↑ 全館内を案内していただいた



↑ 記念撮影

見学後、本学図書館職員が学生に聞いた意見は以下の通りである。「各所にある案内表示や注意書きが見やすくきれいだったため、本学の図書館でも、見やすい案内をしてみてもどうか。例えば、基礎看護なら注射器を簡略化した(ピクトグラムのような)イラストと文字で、書架の側面の案内表示として貼る。ポップや展示を同じテーマで本を集めてすることで、統一感がでる。飛び出す絵本(見学中、絵本の部屋で見せていただいた)のような、飛び出す飾りを作ってみてもどうか。」他大学から学んだことを、自分の所属する学科の場合を考え、自分の大学の図書館では

何ができるかを具体的に考察している姿に成長を感じる。

広島女学院大学訪問後のアンケート

<p>① 広島女学院大学を訪問した感想をお書きください。</p> <ul style="list-style-type: none">・障害者に対するバリアフリーができていてよい・女子大ということもあり、館内が清潔で所々のPOPがかわいかった。・大きくて飲食OKの部屋があったり、個室として使える部屋があったりと施設が充実していた。・百人一首や昔の貴重な品も保管しており、生徒なら気軽に見られるところが、貴重な体験を増やすことができていると思った。・広い、本を探しやすい・本のPOP、本立て、本を返す所がわからなかった場合の棚、絵本ゾーンなどアイデアがある・個々の机の多さ・古い本を1階の入り口近くに置いて、みんなが見れるようにしてある・すごしやすい空間
<p>② 図書館の様子や、学生の活動の中で印象に残ったことなどをお書きください。</p> <ul style="list-style-type: none">・学生の視点に立ち、PCやインターネットや机、掲示物などが充実していた。・同じPOPや本の展示でも、個々がバラバラに作るだけじゃなくて、何か一つ統一感を持たせることでまとまりが出ると思った。・地下があって、地下に動く本棚があって、そこに新聞なども保管できるので、新しいものも取り入れよう！という気持ちになるのかなと思った。・SNSをしている（情報発信・予約）
<p>③ 今後の活動に取り入れたい、役立てたいことは何でしたか。</p> <ul style="list-style-type: none">・本の返却棚・クイズ・POP・個人的にPOPの作り方が固まっていたなと思ったので、これからもっとシンプルで数を作るなど工夫をしていこうと思った。・取り入れられませんが、図書室を2倍くらいに増築してほしいですね。・都市大も女子が多いので、かわいい感じにするともっと利用が増えるかなと思った。・本のPOPを増やす（種類ごとにまとめる）・本棚にロゴ(?)みたいなものをつける（本を探しやすくする）・みんながあまり手に取らなさそうな本を表に出してみる・(机の配置を変えてみる)・本の配置をかえる(種類、学科、ジャンル…)・(宇品図書館のSNSを作ってみる)

④ 広島修道大学 (2月27日 (木))

広島修道大学：図書館ピアサポーター3名

本学学生：子ども教育学科4年1名・3年1名・2年1名、看護学科1年1名、
リハビリテーション学科2年2名

広島修道大学訪問時の写真



↑ 自己紹介と各大学の活動について説明

↑ 2グループに分かれて話し合い ↑



↑ ピアサポーターのおすすめ本紹介コーナーと展示コーナー ↑

↑ 記念撮影

広島修道大学は、図書館に学生が関わる活動を「アルバイト」として行ってきて長く、図書館においても役割として位置づいている。多くの学科からの学生が所属しているなかで、組織的に運営し、協力し合い自主的に活動している学生の姿がある。この現在の姿は、図書館職員の方々の日々のご指導の賜物であるとともに、先輩たちが培ってきた大きな財産である。この財産がないのが本学の状況である。活動として何が出来て何ができないのかの多くを学ぶことが出来た。また、大きな発見の機会も得た。他大学から学ぶことばかりを考え訪問していた中で、アンケートにあるように他大学との交流に大きな興味を持っていただけただことに驚いた。他大学との交流については、本学学生にとっては図書館の活動のなかで行ってきた当たりまえの活動であり、この部分に興味を持っていただけただことに、本学学生も意外性を持ったようである。このことは、本学図書館サークルの活動の独自性に気づくことができた良い機会となった。

広島修道大学訪問後の本学学生のアンケート結果と広島修道大学学生のアンケート結果

① 広島修道大学を訪問して、また図書館で活動している学生さんとの交流をしてみての感想をお書きください。

【本学学生】

- ・とても丁寧に説明をしていただき、学校によって図書館の利用目的は様々だなと感じました。
- ・丁寧に質問に答えてくれた。
- ・新しい方法の発見とどこに広報を置くところがいいのか
- ・場所、それぞれの活用のしかた

- ・今までの活動とは違い、1つのことを集中的にやられていた（イベント係、グッズ係など）
- ・役割分担をすることにより、作業の効率を上げ、一人一人に主体性を身に付けさせていた。
- ・他大学や西風新都キャンパスの図書館の学生さんはバイトで入っておられると知って、バイトがきっかけの方が多いんだと知りました。
- ・自分達がしていない活動やどのような活動をしているのかなど知れたので良かった

【広島修道大学学生】

- ・他大学の図書館で活動している学生さんと交流することが初めてだったため、とても勉強になりました。図書館をよりよくしたいとの思いで活動しているということが同じで嬉しかったです。いろんな図書館との関わり方があるという新発見がありました。
- ・「図書館新聞をあまり手にとってもらえない」という共通の悩みがあって一緒に解決する方法を考えることができとても良かったです。
- ・今年立ち上がったばかりの図書館サークルなのに非常に多くの企画をたちあげていてすばらしいと思った。

② 図書館の様子や、学生の活動の中で印象に残ったことなどをお書きください。

【本学学生】

- ・キャラクター作成や、自分達で企画をして運営を行っていることに驚きました。
- ・企画書から活動の提案を行っていてすごいと思った。
- ・広く、広いからできることをしっかりと取り入れていた。
- ・係分けをすることで、良い仕事をしようとしている印象がでてきた
- ・主体性を大切に
- ・館内が広い
- ・宇品と比べて図書館が広かったので、宇品にはない設備がたくさんあった。
- ・3Fがとても広く、とてもきれいに使用されていたのですごいと思った。

【広島修道大学学生】

- ・都市学園大学さんは看護や教育など専門的なことを学ばれているので、それを生かして勉強カルタを作っているということが印象に残りました。
- ・都市学園大学さんは夏休みを利用して多くの大学と交流されていること
- ・カルタや認知症ブックカフェなどの企画は公的な施設と共同で取り組んでいて、とても学生のためにもなるし、地域のためにもなるなと感じた。

③ 今後の活動に取り入れたい、役立てたいことは何でしたか。

【本学学生】

- ・もっと学内での取り組みもしてみたいと思いました。キャラクター（マスコット）も作ってみたいです。
- ・学内での活動にも力を入れたいと思った。自分からも活動の提案をしてみようと思った。
- ・広報の置き場所、伝え方
- ・間本などの展示→1フレーズだけを書いておき、興味を持ってもらえる
- ・イベント

- ・ 掲示物の掲示場所（目立つ、手にとりやすい）
- ・ 図書館のキャラクターやグッズ作りです。企画書を出して公的なので良い。
- ・ ゆるキャラやグッズ作り、クイズラリーなど

【広島修道大学学生】

- ・ 積極的に他大学の図書館を訪問し、交流をしていると分かったので、修道大学図書館もそのような交流を気軽に行えたら収穫が多くなるのかなと思いました。
- ・ 他大学との交流
- ・ 修道大学は学外での企画が少なく、地域との交流もあまりないので、都市学園さんのようにどんどん学外にも企画を広げていけばいいと思う。自身の学んでいる専門知識と図書館での活動をリンクして企画を立ち上げることができればもっと面白い活動ができそう。

(5) 広島都市学園大学らしい独自性のある活動

① 他大学図書館訪問

上記(4)に挙げたような活動を行った。

② 広島市立中央図書館と西風キャンパス教員と図書館サークルとの協働

☆認知症にやさしい図書館の活動として、西風図書館・教員と認知症ブックカフェや認知症関連本の展示などを行っている。図書館サークルができ、サークルとして活動に取り組んでいる。



・ 第1回認知症ブックカフェ (11月17日(日))

リハビリテーション学科3年1名、2年3名、1年3名、看護学科1年1名、子ども教育学科3年1名、2年1名

認知症に関係のある本のブックトーク、絵本の読み聞かせをサークル学生が担当する。その後、茶話会、新聞棒体操(指導: 本学教員)の手伝いをする。



ブックトークの様子





↑ 絵本の読み聞かせの様子



↑ 体操の様子 ↑



第1回 認知症カフェ（11月17日）アンケートまとめ

参加学生 10名：リハビリテーション学科7名、看護学科1名、子ども教育学科2名

1、図書館サークルとして参加してサークル活動の一部として知ることができた

はい（ 10 ）名 いいえ（ 0 ）名

2、①今回の活動に参加して、活動の意義が自分なりに理解できた

はい（ 10 ）名 いいえ（ 0 ）名

②理解できたこと、理解できなかったことについて簡単に書いてください

- ・学内だけでなく、地域に出ることの大切さが理解できた
- ・高齢者の方は、認知症に対し前向きに考えているということを理解しました。
- ・この活動をすることで、色々な方と交流することができると共に、自分にとっても財産になると思いました。
- ・ありがとう、よかったよなど、声をかけてもらったときに、この活動の必要性を感じました。
- ・認知症についての予防や対策が理解できた。理解できないことは特になし。
- ・質問されて答えられなかったのも、もっと慣れて喋れるようにしたい。
- ・認知症に関してのイメージをよいものにすること
- ・高齢の方とお話することはめったにないので、良い機会でした。
- ・本を通じて人と関わることの重要性
- ・話を聞くだけでも、その人の心がやわらかくなるのがわかった。

3、今後もこのような活動に参加したい

はい（ 9 ）名 いいえ（ 0 ）名 わからない（ 1 ）名

4、今後、サークルとしてどのような活動を行いたいですか

- ・高齢者ばかりでなく子供向けなものもやってみたいです。
- ・色々な高齢者の方と接して、楽しい活動を行いたいです。
- ・ブックカフェなど、本を通じた活動に参加していきたい。
- ・他に交流できる場や、自分達だけでも仲良く交流できる会が開けたら良いなと思った。
- ・こういう高齢の方と触れ合い、お話しさせていただき楽しかったので、外の方とも輪を広げる活動をしていきたいです。
- ・話し合いをしてどんなイベントをしようか考えたい。
- ・学校内のイベントを考えたい。

・第2回 認知症ブックカフェ（1月19日（日））

リハビリテーション学科3年1名、2年2名、看護学科1年2名、子ども教育学科3年1名

認知症に関係のある絵本の読み聞かせをサークル学生が担当する。その後、参加者の方と「昭和を振り返ろう」のテーマで茶話会を行う。

第2回 認知症カフェ（1月19日） アンケートまとめ

参加者8名（リハビリテーション学科5名、看護学科2名、子ども教育学科1名）

1、 図書館サークルとして参加して、サークルの活動の一部を知ることができましたか

はい （ 8 ）名 いいえ（ 0 ）名

2、 今回の活動に参加して、活動の意義が自分なりに理解できましたか

理解できたこと、理解できていないことについて、簡単に書いてください

- ・昭和を振り返ることと、認知症の関係性について理解することができた
- ・傾聴するだけでも人の心に寄り添うことができることがわかった。
- ・これからの自分にとって、とてもためになる、将来に生かすことができること。
- ・人に自分のことを話す場を作ることで、話し手に喜んでもらうことができた。
- ・人とのコミュニケーションや対話の機会は認知症の理解を深めたり、また認知症そのものの予防になる可能性を感じた。理解できた。
- ・昭和について知らなかったので、知れてよかったです。
- ・昔のことを思い出して話すことで、忘れることを妨げる
- ・本の影響力がどれほどのものかを知れた

3、 今後もこのような活動に参加したいですか

はい （ 8 ）名 いいえ（ 0 ）名 わからない（ 0 ）名

4、 上記の主となる理由は何ですか

- ・一度でもブックトークをしてコミュニケーション力をきたえたい。
- ・ボランティア活動に参加してコミュニケーションなどのスキルを上げたい。
- ・こういった活動に参加することによって知識も増えコミュニケーションの取り方が身につくと思ったから。
- ・日頃は同世代の人としかあまり話さないけれど、この活動を通して世代を超えて関わることができるから。
- ・人との関わりの大切さや一人一人の人の考えや経験を感じられるとても貴重な場だと思ったから。
- ・自分が働きだしてから身についたことが生かせると思います。
- ・とても楽しかった。自分の知識が増える。
- ・読み聞かせのスキルを極める

5、 今後、サークルとしてどのような活動を行いたいですか

- ・認知症についてもっと詳しく知りたい。
- ・昭和時代と平成時代を比べて、お互いに話をしたい。
- ・認知症にやさしい図書館という活動継続と、より認知症について深く学べる活動を行いたい。

- ・認知症について学べる活動がしたい。
- ・認知症にやさしい図書館を作るために自分たちに何ができるか、どのようなことに挑戦したいか、などをサークル間同士で話し合える場のような機会をつくってみたいと思いました。(何か案があるわけではありませんが・・・)
- ・外部の方との関わりをもっと増やしていきたいです。
- ・外部の人や他学校の人との交流がしたい。
- ・読みたくなる本の紹介をしたい。

看護学科も、リハビリテーション学科も、そして子ども教育学科も、将来の仕事で共通にかかわる可能性のある方々と、認知症をテーマとした本を中心に直接触れ合う機会を持つことができました。また、自分自身のコミュニケーション力を鍛える機会にもなっている。このように、様々な手法により、人と人を本が繋ぐ機会を持つことで大きな学びになっているようである。

・2月15日（土）力田病院認知症カフェ

リハビリテーション学科3年1名、看護学科1年1名、子ども教育学科3年1名

11月17日「認知症ブックカフェ」に参加された力田病院院長により、誘いを受け、同病院で行われている「認知症カフェ」に参加する。対象は地域の高齢者。絵本の読み聞かせ、ブックトーク、手遊び、折り紙を行う。



↑ 絵本の読み聞かせの様子



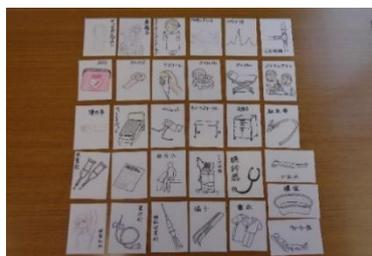
↑ ブックトークの様子



↑ 手遊びの様子

・学習支援カルタづくり

前期に看護学科2年が学習に関わる言葉を選択し（看護学科の図書館運営委員の教員に内容の確認をしてもらう）、後期に看護学科1年とサークル長が中心になり看護学科に関わる内容のカルタを製作する。子ども教育学科に関わる内容のカルタは製作途中である。



↑ 取り札



↑ 読み札



↑ 取り札と読み札

IV 研究の考察と今後の課題

1、研究の結果と考察

(1) 学生が創る図書館へ

学生が図書館の活動に協力し、学生のコーナーが図書館にあり、学生が図書館をよくするために集団で話し合い活動している」という状況が日常的に生じた1年間であった。行事（ビブリオバトルなど）も運営まで行い、「学生が創る図書館」に踏み出すことができた。その姿に、各学科の教員が興味を持ち、活動に協力をしてくださる機会（図書館新聞、ビブリオバトル、学習支援クイズづくりなど）もあった。

(2) 学科を超えた学生のかかわり

「本」を中心にかかわる機会を持つことができた。夏休みには子どもの頃に自分の好きだった絵本を選択し、好きだった理由とともに、読み合った。「認知症ブックカフェ」の準備では読み合った後に、意見を出し合い、再度読むという機会を持つことができた。また、ビブリオバトルでは、会場の飾りつけや本番の役割分担をし、協力し合って遂行することができた。一緒に活動してみると話が弾み、また次の活動に安心して取り組めるという循環が生まれていった。図書館職員などのお膳立てがなければできない状況が少しずつ解消され、自発さを増していく姿があった。しかしながら図書館サークルだけの自立的運営は難しく、学生同士でのかかわりづくりからはじまり、学生同士で協議し合い自ら要求が出せる自治的な運営までの道のりは遠い。構成員の状況や集団の発展段階を考察したうえで、次年度以降の活動の内容を検討する。

(3) 図書館にかかわる教職員の協働

学生の協働を作り出すために、子ども教育学科所属の教員である館長と両館図書館職員が協働活動を行う機会を得た。両館の違いを超えて、各々の特性に応じた役割分担をし、学生や学生の活動にかかわっていった。これまで学生がいなかった行事に学生が入るだけでも逆に負担もあったであろうが、みごとに学生だけで運営したビブリオバトル後には、称賛の声があがった。日々の業務に加えて、電話やメール、ミーティングで懸命に調整し合う姿があった。

(4) 図書館利用の量的広がり—学生の貸し出し数—

学生の貸し出し数は、残念ながらこの1年間では大きな変化がなかった。2019年度は貸出12,459冊（前年度12,575冊）、貸出人数5,540人（前年度5,678人）であった。但し、3月後半は、新型コロナウイルス感染対策のため両館とも閉館としたため、2018年度3月貸出312冊と比べ、2019年度は230冊と減少している。このことを考慮すると、横ばい状態であるといえよう。

しかし、サークル員になり、来館するようになった学生、教養にかかわる本を借りるようになった学生もいる。サークルの中で、「この本はおもしろい」というやり取りもみられるようになった。そして、年間を通して変化があったのが、教員の貸し出し数の増加と、授業での図書館利用

である。学生が授業で来館した結果、図書館という場に慣れていく姿もみられる。推測すると、各学科の「学生が集まれば、教員が集まる」のかもしれない。今後は「教員が集まれば、学生が集まる」、「学生が集まれば、教員が集まる」の相互作用が生まれるように機会をつくっていく。

(5) 図書館利用で深める学び

深める学びに関しても困難さがあった。看護学科はサークル員が1・2年生、とりわけ1年生が多く、大学での学びに入りつつある状況であった。その1年生と図書館の本をもとに学習支援の問題づくりをした掲示後に、図書館で看護師国家試験対策の勉強をしている上級生たちや教員が問題づくりの協力をしてくれる姿があった。また、掲示した問題を多くの学生が試している姿が見られた。サークルの活動の一つとして、図書館という場で学年を超えて学びを伝え・つながるツールを作ることは意味を持つことがわかった。専門的な深まりに関しては、より多くの教員が参加することで、より深まる可能性が高くなるので、参加の機会を持ちたい。

(6) 大学図書館訪問の意義

図書館の方々が共通して、学生に対して図書館を有効に利用してほしいメッセージに溢れた図書館を創っているということを知った。共通に見えることも各図書館には独自性があり、訪問した学生たちは単に模倣するだけでなく、自分たちにできる方法、個々の個性を出す方法を模索しようとしていた。図書館にかかわる活動をしている他大学の学生たちと直接話げできたことは、その前と後で不安な顔つきが自信を持つ満足な顔に変わっているのもわかった。本学の中では少数派のサークルであるが、大学を超えて同志がいることに安心したようである。さらに、大学を超えて多くの先輩たちがおり、自分たちが経験していない様々なことを学べ、これからすべきことが具体的に見えてきたからである。

訪問にかかわり、ご多用の中丁寧にご対応して下さった各大学の図書館の方々には感謝を申し上げます。

2、今後に向けて

(1) サークルとしての活動の明確化

山口大学吉田キャンパスの総合図書館で図書館職員の方にもお願いをし「学生協働」の活動について伺った。その際に、サークルの活動とアルバイトの業務を区別していることを教えていただいた。賃金が生じるアルバイトと「関心や趣味を同じくする人の集まり」としてのサークル、その違いと意義を理解しながらサークルとして行うことを確認したい。

(2) 理念づくり—継続をしていくために—

「図書館を良くしていこうと活動する」ボランティア団体があり、長い歴史を持つ、梅光学院大学図書館館長に、「図書館サポーター」についてお話を伺った。継続していくためには、理念を持つことが必要であることを教えていただいた。今年度の活動の状況から、学生・図書館職員と

館長・教員が協力して、理念を創っていききたい。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」

訪問した大学では、学生たちが主体的な活動をしており、この自主的運営をするにはどうすべきかが本学図書館サークルの大きなテーマであるが、後期に入れば、機会をつくれば主体的に参加する学生も生まれてきた。その姿を見つけ喜ぶ図書館職員の姿もあった。そして、本学図書館サークルの活動の独自性も発見しつつある。それは、本学の学科の独自性と重なり、そこを深めていくことが、対話的になり、さらなる主体性が生まれる機会になっている。所属学科の学びの具体的活用ができるよう、「主体的・対話的で深い学び」の探究をしていく。

(4) 学びの場としてのコミュニティづくり

本研究は、館長と両館図書館職員が協力しあい、目的意識の中で懸命に行った実践的研究である。その意味で、研究・サークルへの関わりという点で、まさに各々の得意分野を活かしながら、館長・図書館職員の懸命な努力の中で協働体制をとることができた。教育改革の中、「読書」「学習」「情報」の3つのセンターとしての図書館の位置づけ、とりわけ「情報センター」としての位置づけを果たすことが、知の拠点としての大学を支えるためにますます重要になってきている。図書館には知りたい・学びたい情報があるという機能面を重視することで、学びの場となっていくことができる。こうした面だけではなく、利用者である学生・教員などがより足を運びやすくする図書館を目指すことも重要であり、学びを中心としながら学生が創造するコミュニティの場になっていくことも重要である。サークルを中心としながらコミュニティを広げ、今回の協働経験を活かしていきたい。学ぶことは、人間の権利である。この権利を大学図書館の役割を担うことで保障できるように心がけていく所存である。本学の特性を活かし、人的環境づくりを核にした物的・空間的環境づくりに心がけることが重要であること、他大学図書館や公共図書館など他の機関とのつながりの中で本学図書館サークルの独自性を伸ばしていきたい。

V おわりに

本研究は、館長からの申し出に、図書館職員が承諾し協力していくかたちで行われた。本文も図書館職員と館長が協力して執筆している。館長となり1年目に大学図書館の位置づけに課題意識を持ち、2年目にこの研究を行うことで図書館を中心に学生・図書館職員・教員の意識の変革を求めて行った。共通の目的を持つことで協働はある意味達成できた。

新型コロナウイルスの感染を防ぐために、3月から学生は大学に来ることができなくなった。図書館に、集まり、一緒に、身近で、かかわり合って、活動することが出来なくなってしまった。これからは、かかわり方の新しい時代に突入すると言われる。これまで、共同・協同・協働が求められてきたが、今後はこれまでとは異なる方法の共同・協同・協働の可能性を考えていかなければならない。さらに、紙媒体の図書が電子化し、加速する可能性もある。

しかしながら、他大学の図書館を学生とともに訪問させていただいたり、また他大学に図書館学生協働をテーマにお話を伺ったりした中で人間的なかわりを持つことが出来た。その結果、やはり学生たちをはじめ教職員も感動し満足するのである。本学の図書館のみならず、図書を通して多様な人たちが協働を見る機会を得た。

本学の看護学科、リハビリテーション学科、子ども教育学科のどの学科も他者とかかわる専門的な仕事である。図書を媒介にして多様な他者にかかわる機会は、そして学科を超えた学生同士の協働の機会は、本学図書館に良い影響をもたらしたと信じている。

図書館サークルの活動がかけがえのない学生の自発的な活動であること、各学科での学びが共有されて互いに学びになること、こうしたかわりや経験を大切にして、今後も学生サークルを継続していきたい。そして学生が通過するだけの図書館ではなく、学生の居場所となる図書館を目指していきたい。

図書館サークルに興味を持ち所属し、授業時間の合間に学生コーナーを飾るなど参加をしてくれた学生、様々なイベントに自分から主体的に参加をしてくれた学生たちに感謝したい。また、普段の業務に加えて本研究に協力してくださった方々には大変感謝している。

最後になりますが、今回の研究助成に関して、私立大学図書館協会 2017・2018 年度会長校 名城大学、2019・2020 年度会長校 國學院大學には大変お世話になりました。手続き等丁寧にご教示くださるとともに、このような研究の機会を持てたことを感謝いたします。

引用

(1) 全国大学生生活協同組合連合会「第 55 回学生生活実態調査 概要報告」(調査実施時期: 2019 年 10~11 月調査、調査対象: 全国の国公立および私立大学の学部学生、回収数: 10,832 30 大学回収率 33.3%)

(2) 全国大学生生活協同組合連合会「第 54 回学生生活実態調査 概要報告」(調査実施時期: 2018 年 10~11 月調査、調査対象: 全国の国公立および私立大学の学部学生、回収数: 10,980 30 大学回収率 35.2%)

(3) 文化庁 「国語に関する世論調査」2018 年度調査 (調査時期 2019 年 2~3 月 全国 16 歳以上の男女 調査対象総数 3,590 人 有効回答数 1,960 人)

(4) 私立大学図書館協会 2019 年度研究助成本学申請書に記載

参考文献

- ・根本彰著 『教育改革のための学校図書館』 東京大学出版会 2019 年 (初版)
- ・渡邊重夫著 『子どもの人権と学校図書館』 青弓社 2018 年 (第 1 刷)
- ・松田ユリ子著 『学校図書館はカラフルな学びの場』 ペリかん社 2018 年 (初版第 1 刷)
- ・猪谷千香著 『つながる図書館 ―コミュニティの核をめざす試み―』 ちくま新書 2019 年 (初版 2014 年)